



二十五年前

森田 玲子

阿蘇ときけば何か思い出す事の一つや二つはある筈だと人にきかれて、なんにもない、と言いきりそう思いこんでいた私は、それから幾日もたった今日、バスの窓からぼんやり車の流れをみていて、ふっとはるか昔に、並並の事ではなくて戸下へ行ったことのあるのを思い浮べ、ハタと息がつまる思いであわてた。

玉名の田舎で埋骨をすまずと従弟とは別れていよいよ本当の新婚旅行ではあったが、今こそ温泉は大好きであるが、どうしてあの頃にちぢばばみたいに温泉めぐりなどしたのかとおかしくなるように、湯の尻、指宿、そして最期に行つたのが阿蘇の戸下温泉であった。

こんな事をまるで子供のよう断片的にしか思い出せないでいた時、ここまではよかった、つなぐれた数珠玉の一つのように次にぼっかり浮んだのは、その旅に控えた夜の夫の顔であった。私は胸をつかれて又一層まいった。

昭和十九年の夏になると戦局は、負傷の長療養のあと、九ヶ月を軍隊から離れたこの死にそこないの夫を又々沖繩へかりたて、たたいやぶれた。こんな夫婦が戦争につながら一切のものに鈍感でいられたくない。そうだ、今日は与えられた数字ももうとつとこえてしまったけれど、いつか、私はこのころの日々の事をこそ、どんなに長くかゝっても必ず書きとめておかななくてはならない。(主婦)

阿蘇と阿蘇神社

高木 盛義

阿蘇山は、その大規模なカルデラと雄大な火山地形のゆえに、世界に冠たる観光資源となっているが、一面阿蘇地方にはすぐれた文化財が数多く包蔵され、火の国の歴史そのものを物語る史実が枚挙に暇ないほどである。

して、神威の加護を祈り、五穀の豊穡を願う、古代の習俗を見事に伝承した姿をそのままに残しているが、これは健甞竜命が農業神として深く尊崇され、また古代人の自然崇拜による霊峰阿蘇の活動自体を命の思召と考えた霊威神としての信仰とが書かれる歴史として遺された、まさに無形文化財というべきであろう。

阿蘇神社の御祭神は健甞竜命、阿蘇津媛命、草部吉見神、国造速瓶国命外合計十二神を奉祀してあるが、古来「十二の宮」と呼ばれて来た。十世紀にできた「延喜式」の神名帳には肥後の神社が四座のせられているが、その中三座はこの阿蘇神社で、「健甞竜命の神の社」「阿蘇比咩の社」、「国造の神の社」として

社堂の一つに「下野の狩の絵図」があるがこれは赤水付近の杵島岳の山裾で、健甞竜命が田畑の害をなす鳥獣を狩られその生贖をもって天神地祇を祭られたのが恒例となり演武的行事となり、建久四年五月、頼朝の富士の裾野の巻符の時はその典例故実を梶原景時を下向して習わせたと伝えられており、巻符のこうしとして知られる歴史がある。

火の国を開発されたのは神武天皇の御孫健甞竜命と伝えられている。今日阿蘇神社の三大神事といわれている、「田作神事」「田植神事」「田の実の神事」あるいは彼犬原にある霜の害の寒霜の害を除く「火たぎの神事」などは、慎んで天を祭り、自然の威力に恐懼

連綿として二千有余年、齋き祭る阿蘇神社の大宮司阿蘇家は、鎌倉、南北朝、室町時代にかけて、優勢な兵馬の権を提げて威名を九州にふるい、元寇の折は阿蘇惟景が、建武の頃は惟時、惟直、弟惟成が、征西將軍宮を奉じては惟武、惟政惟澄と歴代王事に尽したことは「阿蘇文書」に明白であり、その他諭旨や令旨や公私の古文書が、わが国国史研究の貴重

な資料として保存されている。「蜀紅の綿」と称されてきた古代織物は、「剋糸」と呼ばれる紗の上に絨を植えて模様刺繍したもので、勿論渡来の品であろうが、織物の歴史を知る上にまことに貴重な価値をもつもので阿蘇家の古さをものがる宝物である。

西巖殿寺はもと山上の古坊中に、近衛天皇の天養三年、最榮説師によって建立され、本地垂迹の説に従い神仏習合の具現されたもので、三六坊(僧侶)四六庵(山伏)が櫛比し衆徒(僧)行者(山伏)集団の霊威神への祈禱が競われたもの、戦国争乱に絶滅、清正入国後現在の地に再建されたものである。

吊玉 蜀黍

田尻 牧夫 (「鶴」所屬)

火山灰道の豊年踊来て見たり
雪まぶし吊玉蜀黍は風晒し
阿蘇噴くや雪古りにつつ一毛田
藁塚や熔岩磊々と川細り
轍道森に入りゆき阿蘇吹雪く

この現在の形の配置は随分省略されたもので、もとは十三個の神殿があったもので、品字形の三神殿の中、奥の棟は諸神を祭り、向って左が男神(一、三、五、七、九の五神)、右が女神(二、四、六、八、十の五神)、左右の土壇が、十一の堂と十二の宮の遺趾である。

この寺に征西將軍宛の「仏舍利寄進状」、後奈良天皇御宸筆の「紺地金泥般若心経」がある。何れも国指定の重要文化財である。

現在の神殿は幕末の天保十一年から十四

阿蘇と阿蘇神社こそ、まことに火の国を語る、天地自然に描かれた史実そのものである。阿蘇の観光に、阿蘇の開発に阿蘇の村造りにこの得難い歴史を、先祖の血の通う遺産を生かすべきではなからうか。(熊本県立図書館副館長)